

明智サトリの

邪神事件簿

2



プロローグ

第二話 「怪人二十面相」

その日、わたしと先生は、戸山ヶ原に来ていた。

遠くに巨大なカマボコを並べたような建物が見える。

うっそうとした杉林の中を進んでいくと、ボロボロの洋館が忽然と現れた。

昼間だというのに辺りは薄暗く、ただカラスの不気味な鳴き声だけが静寂の中に響き渡っている。人の住む世界から隔絶された、まさしくお化けでも出てきそうな場所だ。

「ほ、本当にここにいるんでしょうか……？」

「私の勤が正しければね」

先生はピストルを構える。

「行くぞッ」

「は、はい！」

「ピッポー！」

扉に向かい走っていく先生。わたしもピッポちゃんを連れて追う。

先生は玄関のドアを静かに開く。鍵も壊れたままになっているようだ。

わたしたちは警戒しながら屋敷の中に入る。

中も薄暗いけど、人が生活できる程度には片付けられているように見える。

「そろそろ来る頃だと思っていたよ」

「！」

どこからともなく、誰かの声が響く。

そしてわたしたちの目の前に、黒い影が降り立った。

「に、二十面相……！」

前に会ったときと同様に、人の顔のような模様の、悪趣味なドレスを着ている。

間違いない、怪人二十面相本人だ。

「我が館によくこそ、明智君、小林君」

彼女はまったく焦った様子もなく、丁寧にお辞儀する。

「しかし、よくこの場所がわかったねえ？」

先生は二十面相に銃口を向けたまま答える。

「君に怪人にされた者の手記に、この辺りで君と契約したという記述があつてね。ここから見えるあの施設は、陸軍の射撃場だ。確かにここなら人は寄り付かないな」

「そうなんだよ。残念だなあ、ここは結構気に入っていたんだぜ」

口では残念といいながら、ニヤニヤ笑っている二十面相からは余裕が感じられる。

彼女はパチンと指を鳴らすと、どこからともなくガラスを引っ掻いたような音が聞こえてきた。

「な、何の音!？」

わたしは先生に隠れて周囲をうかがう。

「仕方ない、新しいお家を探すとするよ……」

二十面相はフワッと浮かび上がる。

「待て、二十面相！」

先生は二十面相に発砲したが、弾丸は彼女の身体をすり抜けていってしまった。やっぱり、変幻自在の彼女の身体には銃なんて効かないんだ。

「ハハハ……まあ、せっかくこんなところまで来たんだ。ボクのペットと遊んでいきなよ」

そして、何かの勢いよく、窓を突き破って入ってきた。

「きゃあああ!？」

それはどんな鳥よりも大きい、巨大な翼を持つ怪物だった。全身が鱗で覆われ、頭は馬のように長い。二本の足の先で鋭いかぎ爪が光る。

「ちっ、シャンタク鳥か」

「と、鳥!？」

それよりは、翼竜に近いような気がするけど——とにかく怪鳥は牙を向いて、わたしたちに飛び掛かってきた!

「やれやれ。手伝いたまえ、小林君」

先生の右腕が輝く。

「は、はい! いくよ、ピッポちゃん!」

「ピッポー!」

ピッポちゃんも相手の真似をしたように牙を生やし、回転しながらシャンタク鳥に突っ込んでいった。

わたしたちがシャンタク鳥を倒す間に、二十面相は姿を消してしまっていた。

ピッポちゃんは先生にバラバラにされた怪鳥の死体を、ガツガツと食べている。

「なんでこの子はゲテモノばかり食べるかなあ……?」

普通の食べ物は食べようとしないから、これが唯一の食事。止めようにも止められないんだけど……。

わたしたちはしばらく屋敷の中を調べてみたけど、一般的な日用品ばかりで、特別なものは何もなかった。怪人にされた人に関する情報さえあれば、前もって調査できるのに。

「……一体、何者なんでしょうね、二十面相って……」

蜘蛛男事件で彼女と会ったとき、わたしのことを「素晴らしい成長ぶり」と言っていた。

「どうして二十面相は、わたしのことを知っていたんでしょうか……?」

あのとき初めて彼女と会ったはずなのに、どうして?

「……ふむ、そうだね……」

先生はその場にあった椅子に腰を下ろした。

「怪人二十面相……。奴に関しては、私も全部把握できているわけではないが……ここらで一度整理してみようか」

「は、はい……」

わたしもベッドに腰掛け、先生の言葉を待った。

「あれは……私と君が初めて会った、『黒い魔物』の事件のときだ……」

怪少女

教室の窓から入る夕日の光が、並んでいる机に長い影を落とす。

わたしはその日の放課後、遅くまで友達と賑やかに過ごしていた。家で宿題をやろうとしても、ついつい小説や雑誌を読んではかどらないから、学校で友達と片付けてしまおうと思ったのだ。でも、それはそれでおしゃべりに夢中になってしまい、結局宿題はあまり進まなかった。

わたしは地元の小学校を卒業後、なんとかこの「茗溪高等女学校（めいけいこうとうじょがっこう）」に入学することができた。

帝都の中心部にあるんだけど、わたしの家からは少し遠いので、寄宿舎通いの子よりも早めに帰宅しなければならない。

友達と別れて、校門を出た頃には、もうだいぶ日は落ちていた。

駅への道を急いでいるとき、前から小柄な影がこちらに近づいてくるのが見えた。

子供……？ こんな時間に一人で歩いているなんて、この辺りの子だろうか。洒落た帽子を被り、黒いコートを着ている、奇妙な格好をした女の子だった。

彼女はなぜかわたしの正面で立ち止まった。背からして小学校五年生くらいかな？

そして、わたしをじっと見つめる。子供とは思えないその鋭い眼差しに、わたしは思わずたじろいだ。

「え、えっと……ど、どうしたの……？」

わたしに何か用……？

「あ、ああそっか！ 迷子になったんだね!？」

少女はムッと眉間にしわを寄せて、不機嫌そうな顔になった。

そして突然右手を上げ、何かを私の眼前に突きつける。

「え……？」

それが何だかわかるまで、少し時間がかかった。

ピストルだ。オモチャみたいに小さいピストル。実際オモチャなんだろうけど。

「こ、こらあ。そんなもの人に向けちゃダメでしょっ」

わたしは彼女の小さい手をピストルごと両手で包み、ゆっくりと下ろす。

「……………」

少女はわたしの手を振りほどき、ピストルをコートのポケットにしまう。

「……やれやれ。思い過ごしだったか」

何やら独り言を言うと、彼女はわたしに背を向け、去っていった。

へ、変な子……。わたしはしばらく呆然としてその背を眺めていた。

彼女が道を曲がって消えると我に返り、慌てて後を追う。

「あ、ちょ、ちょっと！」

ひとりでお家に帰るつもりなのかな？ 危ないから近くなら送ってあげなきゃ。最近怪人も出るっていうし、危なくて仕方ないよ。

わたしは少女が曲がった方へ走っていった。

「あれ……？」

しかし、その道に彼女の姿はなかった。ただ遠くにおじいさんが歩いているのが見えるだけだ。

「あの子……なんだったんだろう……」

普通に考えれば、活動写真か何かのマネをしていただけなんだろうけど。

あの大人びた眼差しが、しばらく脳裏に焼きついて離れなかった。

呪いの宝石

翌日、校門をくぐると、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「芳乃さん！」

ひとりの小柄な少女が、わたしの後ろから走り寄る。

「おはよう、早苗ちゃん！」

「お、おはようございます！」

彼女は息を切らしながら挨拶する。わざわざわたしに挨拶するために走ってくれたんだ。

彼女——羽柴早苗（はしばさなえ）ちゃんは、私より二学年下の後輩。

肩の辺りで揃えられた柔らかい髪に、赤いリボンが付いたカチューシャが似合っている。上目遣いの大きい瞳と、小さく華奢な体が、小動物のように愛くるしい。

「あはは。じゃあ校舎までいっしょに行こうか？」

「は、はい！」

彼女は嬉しそうに答えた。

早苗ちゃんと知り合ったのは、彼女がまだ一年生の頃。校舎内で迷っていたところを、わたしが助けたことがきっかけだった。それ以来、わたしに懐いてくれている。

わたしたちは学校のことや、家での出来事を話しながら校舎に入った。わたしは四年生、彼女は二年生なので教室の階が異なる。

「じゃあ、がんばってね！」

「あ！ ま、待ってください……」

別れ際、彼女は急いで鞆から何かを取り出す。



「あの……こ、これ……」

彼女は恥ずかしそうに俯いて、一通の手紙を差し出した。

「ありがとう！」

手紙を受け取ると、彼女は頬を赤らめて微笑んだ。

退屈な裁縫の授業中、わたしはこっそり早苗ちゃんの手紙を開ける。

学年も違うので話す機会も限られているわたしたちは、必然的に手紙の中で話すことが多くなる。

今日はどんなことが書いてあるのだろう。わくわくしながら開く。

華宵先生の優雅な絵の便箋に、丁寧に字が綴られていた。

「親愛なる芳乃様へ

御渡ししたい物が御座いますので、どうか放課後、庭園に来て戴けないでせうか。
心より御待ちして居ります。

早苗」

う～ん、渡したいものってなんだろ？

手紙を見ながら考えていると、友達が興味津々に盗み見しようとしてきたので、慌てて隠してしまった。

お昼の休み時間、お手洗いから教室に戻る途中の廊下。

「待ちなさい」

ふいに、後ろから声をかけられた。

振り向くと、見慣れない人が立っている。

背は高く、長い髪を両側で三つ編みにしている。上級生かな？

彼女は険しい目でわたしを見つめる。

「な、なんでしょう？」

その気迫にわたしはうろたえてしまう。わたし、何か悪いことした……？

「私は五年生の赤井よ。あなたは四年生の小林芳乃さんね」

「は、はい……」

「あの子……羽柴早苗さんとは会わないほうがいいわ」

「え!？」

いきなり何を言うのだろうか。

「な、なんですか？」

「……あなたのことを思って言ってあげてるのよ。貴女が、貴女でいたいのなら。今日は彼女とは会わないこと。会ったとしても何も受け取らないこと」

「——！」

こ、この人、どこまで知って……!？」

「……忠告はしたわよ」

そう言うと、彼女は去ってしまった。

「……な、なんなの、あの人……」

初対面のわたしに、いきなり早苗ちゃんと会うことを禁止するなんて……。

「あ！」

そうか！ あの人、早苗ちゃんを狙ってるんだ！ だからわたしが早苗ちゃんと会うのを妨げようとしてたんだ。

考えてみれば簡単なことだった。早苗ちゃんのような可愛い子なら、姉になりたい人もいて当然。

「うひゃ～」

わたしはその場で一人身悶えする。

特に他意もなく、早苗ちゃんと仲良くしてただけだったけど、気付かぬうちに目の敵にされていたとは。

いっそきっぱり姉宣言してしまえばいい気もするけど……わたしは勉強もあまりできないし、せいぜい教えてあげられるのは調理くらい。ドジや失敗も日常茶飯事だし、誰かの姉になれるほどしっかりしていない。わたしなんか早苗ちゃんの姉になっちゃったら、なんか申し訳ないような……。

でも、だからといって赤井さんに譲ったら、今度は早苗ちゃんと会いにくくなるだろうし……。

やがてチャイムが鳴り教室に戻ったけど、午後の授業はそのことで頭がいっぱいで、授業もまるで頭に入らなかった

。

そして、放課後。

赤井さんには悪いけど、わたしのことを待っている健気な彼女を、放っておけるわけがない。

わたしは少しそわそわしながら庭園へ向かった。

校舎の裏手には、ちょっと本格的な日本庭園があるのだ。

池の周りに配置された築山や石灯籠が、美しい景観を形作っている。

早苗ちゃんは東屋の椅子に腰をかけて待っていた。

わたしの足音に気付くと、彼女は慌てて立ち上がる。

「ごめん、待った？」

「い、いえっ。わたしの方こそ、突然呼び出したりして……」

早苗ちゃんは何度も頭を下げる。

「いいのいいの……」

きよろきよろ。

「どうかしたんですか？」

「え!？」

わたしは無意識に周りを見回し、他の人（主に赤井さん）がいないか確認していたようだ。

「う、ううん、なんでもないよ。それより渡したいものって？」

「あ、はい……」

彼女は鞆から、桃色の小さな包みを取り出した。

そして震える両手で包みを差し出すと、息を吸い込んで、

「よ、芳乃さん——いえ、お姉さま！　どうか早苗を妹にしてください！」

……え？

「え……ええっ!？」

まさか彼女の方から言ってくるなんて！　予想外の展開。

「こ、これはその、わたしからの親愛の証です！　受け取ってください！」

「う、うん……」

勢いに押され、わたしは包みを受け取ってしまった。けっこう重たいけど、なんだろう？

開いてみると、なんと大きな宝石だった。

「こ、これって……!？」

大人の握りこぶしくらいある、黒いダイヤモンド。黒曜石よりも透き通っていて、上品に輝いている。

「だ、だめだよ、こんな高そうなもの受け取れないよ！　というかどうしたのこれ!？」

「そ、それは……」

彼女はなぜか目を逸らす。

こんな大きな宝石、いったいいくらになるのか想像もつかない。確かに早苗ちゃんの家は裕福だけど、いくらなんでもこれは……。

そのとき、突然手の中で宝石が震え、ピンッと赤い亀裂が入った。

「え——」

そこから一気に黒い煙が噴出し、その勢いで宝石は粉々に砕け散った。

「きゃあああ！」

煙は目の前で固まって、太く黒い縄のようなものになり、わたしの身体にグルグルまとわりついてくる。

「な、なに!?　なんなのこれ!？」

そのうち縄の先端が、わたしの口の中に入ってきた。

「ん、んぐっ」

わたしは息ができなくなり、苦しくなってその場でもんどりうって倒れる。

そして、胸の内側から、おぞましい何かがわたしの身体に浸透していく。

「にやる・しゅたん！　にやる・がしゃんな！　にやる・しゅたん！　にやる・がしゃんな！」

早苗ちゃんの叫びが聞こえるけど、わたしの耳がおかしくなったのか、何を言っているのかわからない。

激しい熱さと激しい寒さが同時に襲ってくるような感覚に、手足は痺れ、目はぐるぐる回る。

「ア、ア、ア——」

だめ、気持ち、悪い。

出さなきゃ、吐き出さなきゃ。

「う、え、えええっっ」

わたしは全身を痙攣させながら、不快な何かを体外へ押しやるため、無我夢中で口を開いた。

自分の内臓の味が広がる。黒いどろどろした何か吐き出される。とめどなく吐き出される。

なんなの、これ、きりが無い。

息が、できない——

し——

死ぬ——

そのとき。

「だから言ったのよ」

誰かの、凜とした声。そして、目の前にまばゆい火花が走った。

何か強い力にわたしは弾き飛ばされ、仰向けに倒れた。

誰かの手が、わたしのこめかみに何かを乗せる。

現実か、幻覚か。わたしは柔らかい光に包まれた気がした。

「あ……」

なんて心地よく、温かいのだろう。

瞬く間に動悸と悪寒が治まり、わたしの混濁した身体と意識が元に戻っていく。

目を開けると、見覚えのある顔がわたしを覗きこんでいた。

この人は……確か……お昼に会った……。

「あ……あなたは……」

「私は忠告したはずよ。あの子には会わない、とね。見なさい」

わたしはなんとか上半身を起こし、赤井さんの視線の先を見る。そこには当然早苗ちゃんが立っていたのだが、

「ハハ、アハハ、キャハハハッ！」

なぜか笑っている。その場でクルクル踊りながら、狂ったように笑っている。

いつもの彼女とはまるで別人のようだ。気でも違ってしまったのだろうか？

しかもその足元には、わたしが吐き出した黒い塊がぐちゃぐちゃと波うっている。

「な、な……」

何が、どうなっているの？

「テケリ・リ！ テケリ・リ！」

黒い塊は奇怪な声で鳴きながら、ぐんぐん縦に伸びていき、何かの形になっていく。

やがてそれは真っ黒な人の影のような姿になり、早苗ちゃんの傍らに立った。大人くらいの背丈があり、顔には目も髪も耳もなく、ただ不気味に笑った白い歯だけが光る。

にやにや笑いだけが残っている——と言うと、どこかの童話の一節のようだ。

早苗ちゃんはうっとりとした表情で、その怪物を見上げている。

「ウフフ……ちょっとジャマが入ったけど、まあいいです。予定では芳乃さんを丸ごと魔物にするつもりでしたけど、芳乃さんを媒介にして生み出すことができなかったのでねえ。さっきの石は、インドに伝わる呪いの宝石なんですよ。イギリスに侵略されたインドでは、多くのインド人が犠牲になりました。彼らの怨念が、仏像に埋め込まれていた宝石に集まったんです。その石を手にした人は、呪いでインド人のように真っ黒な魔物になっちゃうんです。早苗は魔物を操る術を知っていますからあ、せいぜい役に立ってもらいます！」

早苗ちゃんの話は、ほとんど耳に入らなかった。

ただ、彼女がおかしくなってしまった。そのことに愕然としていた。

わたしは早苗ちゃんと何度も会ったし、彼女のことはよく知っている。こんな演技ができるような子じゃないのに……

。

「さ……早苗ちゃん……」

わたしはふらつきながらもなんとか立ち上がろうとする。倒れそうになったけど、赤井さんが支えてくれた。

早苗ちゃんは赤井さんを見ると、首を傾げる。

「それで、あなたは誰なんですかあ？ どこかで会ったような気がするんですけどお〜」

「……奇遇ね。私もよ」

早苗ちゃんをねめつける先輩。

しばし、二人は無言で睨み合った。辺りの空気が張り詰める。

その緊張を破るように早苗ちゃんはクスッと笑い、

「まあ誰でもいいですけどお。どのみちあなたなんかには、早苗を止めることはできないですう」

傍らの魔物が、彼女を肩の上にひょいと抱きかかえる。

「それでは皆様、ごきげんよう〜」

早苗ちゃんはわたしたちを見下しながら言い残すと、魔物は彼女を抱えたまま跳ぶように走り去り、庭園の森の中へ消えていった。

わたしは力なく、その場に崩れ落ちた。

「一体……なんで……。早苗……ちゃん……」

もうわけがわからない……。どうしてこんなことに……。

「危ないところだったわね。この『印』がなければ、あなたは魔物に成り果てていたところよ」

印……？

赤井さんは、何か星型の銀色のものを手に持っている。あれをさっき頭に乘せてくれたんだ。不思議な力を持った、お守りみたいなものなのかな。

彼女が助けに来てくれなかったら、今頃わたしは……。考えただけで身震いがする。

「ありがとうございます……。すみません、わたし、赤井さんの言うことも聞かないで……」

「済んでしまったことは仕方がないわ。後のことは私に任せなさい」

彼女が何者なのかわからないけど、不思議な力があるのは確かだ。わたしにはそんな力もないし、ほんとに赤井さんに任せるしかないんだけど……。

去っていく彼女の背に、声をかけた。

「あ、あの！ さ、早苗ちゃんは……も、元に戻せるんですか」

彼女は歩みを止め、振り向かずに言う。

「……明日、本人に会えばわかるわ」

その言葉が気になって、その夜はなかなか寝付けなかった。

黒い魔物

翌朝、わたしはいつもより早めに学校に向かった。早く早苗ちゃんのことを確かめたくて、落ち着かなかったのだ。

わたしは二年生の教室に向かう。

そのとき、廊下で後ろから声がかかった。

「あれ、芳乃さん？」

振り向くと、ちょうど登校してきた早苗ちゃんがいた。

「さ、早苗ちゃん！」

「おはようございます、芳乃さん」

彼女はにっこり微笑んでお辞儀した。何事もなかったようにいつもの態度で、わたしは戸惑う。

「お、おはよう……。そ、その……。昨日のことなんだけど……」

「え？ ああ、昨日はちょっと体調が悪くて、登校できなかったんです」

「……え？」

早苗ちゃんは昨日、登校してない……？

「う、うそ!? だ、だって昨日の朝、わたしと校門で会って、手紙くれたでしょ!？」

わたしは思わず彼女の肩を掴んで揺さぶっていた。

「え、え？ い、いえ、ですから昨日は学校に来ていませんって……」

「そ、そんな……」

じゃあ、昨日わたしと会ったのは。

わたしを魔物にしようとしたのは……一体、誰……？

わたしは昨日一日、夢でも見ていたのだろうか。

それとも、昨日一日が夢だったのか。

考えてみれば、謎の上級生とか、黒い魔物とか、非常識なことばかりだったし……。

「あの、芳乃さん……？ どうかしたんですか……？」

早苗ちゃんが、心配そうにわたしの顔を覗きこむ。我ながら怖い顔をしてたかもしれない。

「あ、う、ううん、な、なんでもないよ、あはは……」

無邪気な早苗ちゃんの顔を見たら、なんだかほっとした。

そうだね、あれは悪い夢だったんだ。夢と現実がごっちゃになってるんだ。

だいたい、あんなこと起きるわけないもんね。

目の前の早苗ちゃんも、おかしくなったりなんかしてない。

気がついたら、わたしは早苗ちゃんを抱きしめていた。

「よ、芳乃さん……!？」

「良かった……早苗ちゃんが無事で……」

「え、え……？」

目を閉じて、彼女の温もりを確かめる。

「よ、芳乃さん……！ あ、あの……！」

「ん？ なあに？」

「は、恥ずかしいです……」

「え？」

見ると、早苗ちゃんは真っ赤になって俯いていた。

周りの子がみんなこっちを見て、ひそひそ話したりしている。

「わあ！ ご、ごめん！」

わたしは慌てて腕を放す。

「い、いえ……で、では……」

早苗ちゃんは顔を鞆で隠して、急いで自分の教室へ走り去ってしまった。

残されたわたしも、周囲の視線から逃げるように階段に向かった。

わたしは早苗ちゃんが無事だったことが嬉しくて、つい抱きしめちゃったけど。

事情を知らない彼女には、別の意味に勘違いさせちゃったかも知れない……。

「ひゃあ〜」

改めて思い返すと、顔から火が出そう。

わたしたたら公衆の面前でなんてことを！

こういうことは瞬く間に噂になって、学校中に広まってしまうのだ。

わたしは構わないけど、早苗ちゃんに迷惑をかけてしまう。

どうやって責任を取るべきか、公式に姉妹を宣言するべきか……そんなことばかり考えて、やっぱり授業は上の空だった。

だけど、その夜。

のぼせていたわたしの頭に、冷水が浴びせられた。

怪人が出沒したとのニュースが、ラジオで放送されたのだ。

宝飾品店のショーウィンドーを破り、二万円相当の金塊を奪い逃走。

怪人の事件自体は珍しくもなかったけど、問題はその外見だ。

全身が真っ黒で、顔には歯だけが光っていたという。

まさか、これは……昨日、わたしから生まれた、黒い魔物……!?

じゃあやっぱり、あのことは本当に起きて……でも、それならあのときの早苗ちゃんは……!?

何もわからないわたしは、ただ不安と恐怖に怯えるしかなかった。

……そうだ、赤井さんだ。あの人なら、きっと色々知っているはず。

会わなきゃ。会って、話をしなきゃ……！

翌日、わたしは赤井さんに会おうと試みたけど、先生に聞いても、五年生にそんな生徒はいないとのことだった。

どうということ？ うちの制服を着て侵入したってこと？ ますます謎は深まるばかり。

それでもわたしは放課後の学校中を走り回って、赤井さんを探した。

あの人しか、真相を知っている人はいないんだ。

走り疲れたわたしは、息を切らせて、壁にもたれかかった。

「赤井……さん……」

あの人が、頼りなのに。

「呼んだかしら？」

そのとき、澄んだ声が、すぐ側で聞こえた。

「……え？」

振り向くと、彼女はそこに立っていた。

「あ、赤井さん！」

わたしは疲れも忘れて駆け寄る。

「も、もう、探したんですよ!? わたし、赤井さんに聞きたいこといっぱいあって——」

「落ち着きなさい。……あの黒い魔物のことね？」

「は、はい。あの、やっぱりラジオで言ってた怪人って……？」

「ご明察。あのとき、あなたから生まれた魔物よ」

「……！」

予感していたこととはいえ、はっきり答えられると愕然とした。

「……そ、そう……ですか……」

どうしよう。わたしから生まれた魔物が、街を襲っているなんて。

「わたしは……わたしは一体、どうしたら……」

「そうね、あなたにも責任はあるわ。私の忠告を無視したせいでこうなったのだから」

「あ……」

赤井さんは冷たく言い放った。だけどそれは紛れもない事実だ。

「責任を感じているのなら、ついてきなさい。あなたにも手伝ってもらおうわ」

そう言って背を向け、歩き始めた。

わたしは少し緊張しながら、彼女の後に従った。

彼女は一体、何者なんだろう……？

旧神の印

わたしたちは学校を出て、そのまま水道橋方面に歩いていった。

神田川に沿って進んでいくと、左右の翼棟が前に突き出ている、特徴的な建物が見えてきた。

彼女の学校かと思ったけど、どうやらアパートのようだ。エレベーターまであるし、なんだか高級そうな所だけど、わたしなんかが入っていいんだろうか？

赤井さんについておずおず進むと、やがて彼女は一室のドアの前で止まった。

表札に「明智探偵事務所」と書いてある。

「え——!？」

探偵事務所って……あの事件のことを、探偵さんに依頼する気なの!？

と思ったら、彼女はドアを手持ちの鍵で開けてしまった。

「入って」

「え、え？ お、おじゃまします……」

なんで赤井さんが、探偵事務所の鍵を持ってるの？

わたしは西洋風の調度品に囲まれた、立派な客間に案内された。

「座っていいわよ」

「は、はい……」

彼女はコーヒーを淹れてくれているようだ。

わたしはどっしりとしたソファに、そわそわしながら座って待った。

やがて彼女は、二人分のコーヒーを持ってきて、テーブルに置いた。香ばしい香りが、クラシックな空間に広がる。

「あ、あの……赤井さんのお父さんって、探偵さんなんですか？」

「ちがうわ」

彼女はわたしに向き直り、真顔で言った。

「私が探偵なのよ」

「へっ……？」

彼女は冗談を言ったのだろうか？

わたしが聞き返そうとすると、突然強い光が視界を覆った。

「きゃ——!？」

一瞬、何が起こったのかわからなかった。

目を凝らすと、服を含めた彼女の全身が銀色に輝いている。そしてその輝いた身体が……縮んでいく!？

「え……」

そこに現れたのは——黒い帽子とコートの、小さい女の子。あの夜、わたしにピストルを向けたあの子の姿だった。

「ええええ!？」

わたしはソファがひっくり返りそうになるほど驚いた。目の前で人が変身してしまったことにも、赤井さんがあの子になってしまったことにも。

「あ、あ、赤井さんが……」

彼女は帽子とコートを脱ぐと、わたしの向かいのソファに腰を下ろした。

子供なのに堂々とコーヒーを飲み始めたけど、落ち着いた態度のせいか、なぜか違和感がない。

「あれは私の変装だよ。校内で君に近づくためのね」

「で、でも今の、どうやったの……!？」

「私は魔法使いなんだよ」

一言で説明された。

手品って意味じゃないんだろうな……。なんというか、科学や常識では説明できないような、不思議な力だろうか。

「表札の通り、私はこの事務所の所長、明智サトリだ。改めてよろしく、小林芳乃君」

「は、はあ……」

わたしはまだ開いた口が塞がらない。

「な、何であなたみたいな子供が、探偵なんか……？ 魔法使いだから……？」

「まあ、そういうことになるな。魔法使いでもなければ、怪人に対抗できないからね」

そしてなにやら彼女は不機嫌そうにわたしを睨む。

「それとっておくが、私はこれでも大人だ。少なくとも君よりは長く生きているつもりなんだが」

「う、うそお!？」

確かに喋り方とかは、その年齢の子供とは思えないけど……。むしろ、女性ですらないんですけど。

「そういえば、なんでサトリちゃんは放課後に、学校の外にいたの？」

まるでわたしのことを待っていたようだった。

彼女はコーヒーを置いて、ため息をつく。

「君より年上と言ったはずだが……まあいい。詳しい説明は省くが、つまり……君は生まれつき怪人になりやすい体質なんだ」

「な、なにそれえ!？」

これまでの16年間、特に重い病気にもかからず、健康に育ってきたはずなのに……。

「まあこればかりは運が悪いとしか言いようがないね」

神様、あんまりです。

「わたしは君が危険な存在かどうか確かめたが、無害そうなので放っておくことにしたんだ。ところが……翌日、ある怪人を追っていたところ、女学生に変装して君の学校に向かっていくではないか」

「ええっ!？」

「だから私も女学生に変装して、後を追った。すると怪人は、君に接触し、何かを渡していた」

「！ そ、それって、早苗ちゃん!？」

「君も翌日にわかったと思うが、あの日羽柴早苗は学校を休んでいた。あれは怪人の変装した偽者だったというわけさ」

「そ、そうだったんだ……」

どうりで、彼女の言動が別人のようだったわけだ。

「私は赤井と名乗って君に忠告したが、君はあっさり無視した。その結果がこれだよ」

「……うう……」

わたしは言い返せない。せっかくのサトリちゃんの行為を無駄にしてしまったのだから、怒られて当然だ。

「私は奴を追ったが、奴も私に気付いていたらしく、巧みに逃げ回った。放課後、庭園でようやく君達を見つけ、君と魔物を分断したというわけさ。ただ結局君の体質を利用して、奴は黒い魔物を生み出してしまった」

「なんであんなものが、わたしの中から……？」

わたしは思い返しただけでも身震いがする。

「あの魔物は、正式名称を『ショゴス』という。地球上のあらゆる生物のもとになったという古代生物だよ。君の細胞に眠る太古の記憶が呼び起こされたとでも言うべきかな」

「は、はあ……？」

そんな生き物、図鑑でも見たことないんですけど……。

「それより、また街で暴れるかもしれないよ？ サトリちゃんの魔法でなんとかできないの？」

彼女はかぶりを振った。

「見つけれさえすれば退治もできようものだが……そもそもこの帝都のどこに隠れているか、どこに現れるか、いつ現れるか。まったくわからないので捜査のしようがないんだよ」

「そ、そんな……」

「しかし、君が協力してくれれば話は別だ」

サトリちゃんは立ち上がり、わたしを指差す。

「え？」

「君から生まれ出たあのショゴスは、君とはいわば親子の関係にあるんだ」

「な、なんかやだなあそれ……」

あんな不気味な怪物と親子だなんて、考えただけでも鳥肌が立つ。

「従って、君が感を研ぎ澄ませば、居場所くらいはわかるかもしれない」

「そ、そんな簡単に……？」

「目を閉じて、しばらく精神を集中してみたまえ」

「う、うーんと、こうかなあ……」

半信半疑で、言われた通りにしてみる。

……………。

……………。

……。

一分後、わたしの意識は闇に落ちていた。

「ぐう……」

パシン！

「い、いた〜い！」

サトリちゃんは容赦なく、わたしの頬を平手打ちしたようだ。

「君には本当に手伝う気があるのかね……？」

うっ、殺気が……。

「だ、だって、わたし最近色々あったから寝てなくて……」

「……ふむ。まあ、その方が好都合かもしれないね」

「え？」

「寝室のベッドでしばらく休んでいたまえ。その間に君専用の『印』を作っておくよ」

「う、うん……」

怪人とか、魔法とか、小さな探偵さんとか……常識から外れたことが立て続けに起こって、結構疲れているのかもしれない。

とにかく今はサトリちゃんだけが頼りだし、彼女に任せるしかないよね……。

普段彼女が使っていると思われるベッドは、大人用のものだから狭くもなく、ふかふかで快適だった。

電灯を消し、横になって目を閉じると、すぐにまた、わたしの意識は闇に沈んでいった。

それからどれだけの時間が経ったのだろう。

「ん……」

わたしはうっすらと目を開けた。十分眠った感じがする。

この部屋には窓がなかったのでわからないけど、時間からしてもうとっくに日は暮れているはず。一応、家に連絡しないと……。

身体を起こし、電灯を点ける。

その場でぼーっとしていると、誰かがパタパタと走ってくる音。

「あ、起きた！」

弾んだ声の持ち主が、寝室に入ってくる。

「どう？ 疲れは取れた？」

「え——」

そこには、わたしがいた。

制服を着たわたしが、わたしを見て微笑んでいる。

……………。

ええと、わたし、まだ寝ぼけてるのかな？

目を擦って、もう一度してみる。

やっぱり、わたしがいる。

彼女の腕を掴んでみる。

ちゃんと感触がある。

「ひ……き……きゃあああ！」

わたしは思わず後ずさった。

な、なんなの、なんなのこれ!?

「あはは、もう芳乃ちゃんったら、そんなに怖がらなくてもいいじゃない♪」

もう一人のわたしはわたしを見てクスクス笑い、わたしに近づいてくる。

「い、いや、こ、来ないで……!」

「あはは、あははは……!」

彼女は無邪気に笑いながら、わたしに手を伸ばす。

「いやあああ!」

すると、彼女は急に咳払いをし、冷めた表情になる。

「やれやれ、まだ気付かないのか、小林君」

「え……?」

彼女の身体が銀色に光る。

そして、サトリちゃんが現れた。

「あ……」

そ、そうか。サトリちゃんがわたしに変装してただけだったんだ。

寝起きでそこまで頭が回らなかった。

「も、もう! お、おどかさないでよ!」

さすがに私は怒る。まったく、いたずらにしてはたちが悪すぎるよ。

「ハハハ、なかなか面白い反応だったよ」

彼女は満足そうに笑って寝室を出て行く。

こ、この子、人をからかうなんて……。

でも今ので、すっかり目が覚めてしまった。

わたしは客間に戻ると、サトリちゃんから『印』を受け取った。

見た感じはそんなに奇妙でもない、銀色に輝く星型の髪飾りだった。

「このお守りも、やっぱり魔法がかかっているの?」

「そうだ。君を怪人にならないようにしておく魔除け——私の魔力を込めて作った、『旧神の印』だよ」

魔力って……どうということだろう?

「頭に付けて、目を閉じ、精神を集中したまえ」

「う、うん……」

わたしはとりあえず言われたとおりにしてみる。

「あの黒い魔物——ショゴスは、どこにいる?」

「え? そ、そんなのわかるわけ——」

そのとき、何かの音が聞こえた。

「あっ!?!」

微かだけど、確かに音が聞こえる。ずるずると這うような音。後頭部右の方向。

わたしは目を開けてその方向を確認したけど、当然視界には何もいない。

「こ、こっちの方向に何か音が聞こえたよ!?!」

「ふむ、上出来だ。これで君をコンパスにしてショゴスの居場所を掴める」

彼女は玄関に向かうと、掛けてあった帽子とコートを取った。

「それでは、行くぞ」

「え!? ま、待って!」

わたしも慌てて準備をする。

家にも電話をしておかなきゃ。今夜は……友達の家泊まるって。

大鳥時計店

アパートを出ると、すっかり日は沈んでいた。

わたしたちは円タクに乗り、少しずつ方向を確かめながら、ショゴスに近づいていった。

集中すると聞こえる音が、だんだん大きくなっていく。

そして——辿り着いた場所は、京橋区の銀座だった。



A Night-view of Gay Ginza Street (Greater Tokyo)

銀座の夜をな照らす美華 (京東大)

もう夜も更けているのに、この界限はネオンサインで彩られ、銀ブラを楽しむ人々で賑わっている。流行のファッションに身を包んだモボやモガを見ていると、アメリカにいるような気分になる。

さすがは東洋一の繁華街だ。

「こんなところにいるなんて、なんか信じられないけど……」

「いや、この辺りは高級な店が並んでいるからね。つまり、次の標的ということだよ」

「そ、そっか……！」

どこかのお店が襲われる前に、なんとかして魔物を止めないと！

銀座通りを進んでいくと、見知った顔にばったり会った。

「あれ、芳乃さん？」

「早苗ちゃん!？」

「どうしたんですか、こんなところで？」

一瞬、ショゴスを引き連れたあの偽者かと思ったけど、私服の着物姿だし、なにより態度がいつも通りだ。

紙袋を持っているので、一度家に帰った後、ここに買い物に来たのだろう。

彼女は制服姿のわたしを見て、驚いているようだ。確かに学校帰りにこんな繁華街を歩いているのは問題かも。

「う、うん、友達の家で勉強会してたらちょっと遅くなっちゃって。お腹がすいたから木村屋のあんパンでも買ってこようかな〜って、あはは……」

「そ、そうですか……」

早苗ちゃんはなんだか不安そうに、わたしの隣にいるサトリちゃんをチラチラ見ている。

「あの、その子は……？」

「あ、ああ、えっとこの子は……この辺りで迷子になっちゃったんだって。だからわたしが、警察まで連れてってあげようと思って」

「……」

即興で言い訳したけど、サトリちゃんは黙って合わせてくれている。

「そ、そうだったんですか」

なぜか早苗ちゃんはほっとしたようだ。

「じゃ、じゃあわたしたち急ぐから！ 早苗ちゃんも早く帰ったほうがいいよ！ ほら、怪人も出るっていうしさ！」

「あ、はい。芳乃さんたちも、どうかお気をつけて」

早苗ちゃんはぺこりとお辞儀し、去っていった。

彼女の姿を見送っていると、急にサトリちゃんがわたしの右足を踏んだ。

「ふぎゃっ！」

「誰が迷子だっ。もう少しまともな言い訳をしまえ」

サトリちゃんはささいなことで腹を立てていた。

ショゴスの気配を追った先……。

交差点側に緩やかに曲線を描く、壮麗なビル。その時計塔は、銀座の新しいシンボルになりつつあった。

「大鳥時計店か……」

「こ、この中にいるよ……」

内臓と内臓が擦れるような、おぞましい音が、すぐ近くで聞こえる。

店内に入ると、まだお客さんで賑わっていた。

あの変装怪人は、この中で堂々と騒ぎを起こすつもりなのだろうか？

あちこちの壁やテーブルに、高価そうな時計や宝飾品が並んでいる。

わたしには縁のなさそうなものばかりだけど、確かにあの魔物を操れば、いくらでも手に入れることができそうだ。

そのとき、店内の奥から悲鳴が聞こえた。

「か、怪人だ！」

誰かが叫ぶ声に続いて、お客も店員も我先にと出口に殺到する。

「行くぞッ」

「う、うん！」

わたしたちはその流れに逆らって、現場の売り場に駆けつける。

そこには、例のショゴスがいた。

「うっ……！」

「本性を現したようだね」

それはもはや、人型さえ留めていない、脈動する大きな黒い肉塊だった。その不定形な体の表面に、無数の目や口などが、泡立つように出たり消えたりしている。

まさに、悪夢を具現化したような怪物だ。

「テケリ・リ！ テケリ・リ！」

奇声を発しながら、四方八方に腕のような器官を何本も伸ばし、手当たり次第に宝石や時計を掴んでいく。

そして身体の中央に大きく開かれた口の中に、次々と放り込んでいく。

「サトリちゃん、あれ……！」

わたしは魔物を奥から眺める小柄な影に気付いた。

「アハハハハ……！ ショゴスよ、全てを飲み込みなさい！ あれも！ これも！ それも！ 全部早苗のものですう！」

キャハハハハッ！」

それは、制服を着た早苗ちゃんだった。

一瞬ぎよっとしたけど、でも落ち着かなきゃ。

あれは偽者、早苗ちゃんに変装している怪人だ。だいたい本物はさっき帰っていったしね！

「そこまでだ」

サトリちゃんがピストルを構える。あのときわたしに向けたピストルだ。

怪人はわたしたちを見て、ニヤリと笑った。

「あら、あなたたちは逃げなくていいんですかあ？」

「仕事柄そうもいなくてね」

サトリちゃんはショゴスに向けて、活動写真のギャングさながらに発砲を始めた。オモチャみたく見えただけ、本物だったんだ！

店内に銃声が響く。普通だったら大騒ぎになるところだ。

しかし銃弾はショゴスの身体にずぼっと埋まってしまい、何の傷も負わせていない。

「キャハハハ、そんなオモチャで早苗のショゴスを倒せるわけないですう！」

怪人は哄笑を上げる。なんとかなんないの……!?

「小林君、ショゴスに命令を送るんだ」

「え？」

「その印なら可能なはずだ。念じても口に出してもいい、とにかくあいつに命令してみてくれ」

「う、うん！」

信じ難い話だけど、とにかくやってみるしかない！

「お、お願い！ やめて！ 止まって！ 宝石を飲み込むのをやめて！」

わたしは叫んで伝えたけど、ショゴスは何の反応も示さない。その様は、さぞかし滑稽だっただろう。

「キャハハハ、無駄無駄無駄ア！ この子は早苗の従順な下僕なんですからねえ！」

「なるほどな」

サトリちゃんはピストルを怪人に向け、引き金を引いた。

「っ！」

偽者とはいえ、早苗ちゃんが撃たれるところは見るに耐えない。

「キャハッ、かゆいわあ！」

しかし彼女は胸を撃たれてもびくともせず、笑い続けるだけだった。

「そ、そんな……！」

怪人っていうのは一体、どういう身体してるの!?

「さ、サトリちゃん！ どうするの!？」

「元からこんなもので倒せるとは思っていないよ」

サトリちゃんの右腕が、銀色に輝き始めた。

変装する気……？ いや、ちがう。光は右腕だけに集中し、弾けるような火花を散らしている。

「……小林君。君は私が子供にしか見えないらしいが……」

「え……？」

こんなときに、何を？

「君がそう思うのも無理はない。なぜなら私は——」

銀色に輝く腕が、真っ直ぐに伸びていく。

「子供の時にある存在と融合し、人間ではなくなったからだ。そのときから……私の時は止まっている」

彼女の右腕は、西洋の騎士が持つような、両刃の剣を思わせる鋭い形に変化した。

そこから電流のような光が何本も流れ、彼女の身を包んでいる。

「つまり……私は俗に言う、『怪人』という奴なんだよ」

一瞬、電光に照らされた彼女の顔が、残酷な笑みを浮かべているように見え、わたしはぞっとした。

「サ……サトリちゃん……」

怪人……サトリちゃんが……？

確かに彼女は様々な魔法を使っている、常人離れした女の子だったけど……。

「私のことをいくら罵っても構わないが……それはこの仕事が片付いてからにしてくれないか」

そう言うと彼女は光の剣と化した右腕を振り回し、ショゴスに向かって走っていった。

そして何本も生えている触腕を、片っ端から次々と切っていく。

切り落とされた腕は床に落ちると、すぐにポロッと崩れて灰になる。

「ちっ、ノーデンスの剣か！ ショゴスよ、先にその女を殺しなさいッ！」

怪人が叫ぶと、ショゴスは宝石を取っていた触腕を止める。

先端が爪のように鋭く尖り、サトリちゃんに向けてあらゆる方向から勢いよく振るわれる！

「サトリちゃん！」

しかし彼女は一瞬で目の前の数本を切断し、そこから跳んで脱出する。

そして忍者のような速さでショゴスの周りを走りながら、自分に向けられた触腕を切り落としていく。

わたしは自分の役目も忘れて、サトリちゃんの戦いぶりに見入っていた。

「あ……あ……！」

怪人はその光景を見て青ざめ、後ずさりしていく。

すぐに新しい触腕が生えてくるけど、腕が減るほうが早い。

生やしては切られ、生やしては切られる。

それを繰り返していくうちに、ショゴスは最初にここで見たときよりも一回り小さくなった。

「小林君！」

サトリちゃんが走りながら叫んだ。

わたしは我に返る。

そうだ、今なら、ショゴスが弱まった今なら——！

「お願い！ 止まって！ わたしの言うことを、聞いてええッ！」

わたしは精一杯の大きな声で叫んだ。

ショゴスの動きがピタッと止まり、痙攣したかのように震える。

そして、口から黒い煙を、煙突のように吐き出した。

「う……うそ……」

怪人がその場に崩れる。

ショゴスの身体から口などの器官が消えて、小さくしぼんでいき、ついにはただの黒い球体になった。

そしてゴロゴロとわたしのほうに転がってきた。

わたしは恐る恐る、それを両手で受け止める。弾力があり、まるで粘土みみたいだ。

見た目が気持ち悪くなくなったからか、思っていたほどの嫌悪感を抱かなかった。

「これで、そいつはもう君のモノだ。あとは飼うなり殺すなり、好きにしまえ」

サトリちゃんが歩いてきた。その右腕はもう元に戻っている。

「そ、そんなこと言われても……」

わたしの命令を聞くようになったからには、もう無害なはずだし。何も殺すことはないと思うけど……。

というか、ほんとに生きてるのかなこれ？

「さて、あとは……」

サトリちゃんは怪人を睨んだ。

「くっ……！」

怪人は慌てて立ち上がり、店内裏手へ逃げていく。

「あっ！」

「私は奴の始末が残ってる。さらばだ、小林君」

サトリちゃんはそれだけ言い残すと、怪人を追って走り去ってしまった。

「え、え!? ちょ、ちょっとサトリちゃん！」

わたしはとにかくショゴスを抱えて、急いで彼女を追う。

「ま、待って！」

サトリちゃんは走りながら、振り向かず答える。

「君はもう無関係だ！ じゃまだから帰れ！ ここからは私の仕事だ！」

な、なあに、その言い方！ せっかくここまで一緒にがんばってきたのに、急に突き放すみたいに。

わたしは少しムツとして、意地でもついていくことに決めた。

「でも、ここまで来たからには、わたしも最後まで手伝うから！」

彼女は一瞬、振り向いてわたしを見たけど、すぐ前に向き直り、

「……勝手にしまえ！」

「うん、勝手にする！」

わたしの足取りは軽くなった。

大爆発

怪人を追って進むと、店内裏手の、従業員が出入りするような区画に入った。真夜中でも明るい店内と違って、ここは薄暗い。

そして——わたしたちは、「早苗ちゃん」を見つけた。

「……え……!？」

そう、さっきまで追っていた、制服を着た偽者じゃない。着物を着た本物の早苗ちゃんだ。

彼女は天井を支える太い柱に、ロープで縛り付けられていた。

「ん〜！」

泣きながらもがいて、何かを訴えているけど、口にさるぐつわをはめられているので、何を言っているのかわからない。

そして、柱には彼女と一緒に、円筒状のものが何本も括り付けられている。それぞれの筒から伸びている紐の先には、線香のように火が点いていて、紐を徐々に短くしていく。

「あ、あ……！」

科学のことはよくわからないわたしでも、どういう状況なのかわかる。

そのとき、どこからともなく甲高い笑い声が響いた。

「キャハハハ！ 本物を捕まえておいて正解でしたあ！ こんなことで役に立つんですからねえ！ 私はまだ捕まるわけにはいかないんです。あなたたちがこの子を助けている間に、逃げさせてもらいます。それでは、ごきげんよう〜！ キャハハハハ！」

「……！」

それっきり、その声は聞こえなくなった。

「さ、早苗ちゃん！」

とにかく、早苗ちゃんを助けなきゃ！

わたしはすぐに、彼女が縛られている柱に向かって走り出す。

すると、サトリちゃんがわたしの腕を掴んで引き止めた。

「おいおい、何をやる気だ小林君。近づいたら危ないじゃないか」

「で、でも、早くなんとかしないと……！」

「いや、あんなにいっぱい導火線があるんじゃ、もう間に合わないね。それよりここで、彼女が爆発するところを見物しようじゃないか。こんな過激なショウ、浅草でも見られないよ、ハハハハ」

な、何を笑ってるの、こんなときに……!？」

わたしは彼女の腕を振り切ろうとするが、どういう力なのか、まったく動かない。

「放して！ 早苗ちゃんが死んじゃう！ 放してよお！」

わたしが必死にもがいていると、突然わたしの身体が宙に浮かび——床に叩きつけられた。

サトリちゃんがわたしに、背負い投げをかけたのだ。

わたしは仰向けに倒れたまま、体が痺れて動けない。

「う……」

先生はわたしを見て、ため息をついた。

「少しは落ち着きたまえ小林君。あれは『本物』じゃないよ。我々がさっきまで追っていた『偽者』さ」

「……え……？」

だ、だって着物着てるし……。

「この怪人は魔法を使い、一瞬で姿を変えられる。そもそも私たちは今夜、本物とは会っていないんだ」

「え、え!? で、でもさっき外で……」

「本物の羽柴早苗は、捕まって利用されることを防ぐため、家から出られない状態にしてある。私が君に変装していただろう？ あれは本物の早苗に電話していたんだよ。君の手帳から連絡先を拝借してね。今夜尋ねるから家で待っていてくれるよう、頼んだんだ」

「な、な……」

そ、そんな、勝手になんてことを……！

「君の頼みなら彼女も断れないだろう？ まあ明日にでも謝ってくれたまえ」

「……」

わたしは口をぽかんと開けたまま、言葉も出ない。

「こいつは本物のフリをして、あらかじめ私たちに会っておいた。まあ私は気付いたが、君にはショゴスの捕獲に集中してほしかったのさ。どのみち私がいれば見抜けるしね」

「で、でも、さっきの声は……？」

彼女は今、しゃべれない状態のはずだけど……？

「腹話術という手品があるのだが、口を閉じたままで話すことができるんだ」

「そ、それだけ……!？」

「君が彼女を助け出したら、隙を突いて印を外され、今度こそショゴスにされただろうね」

「……！」

じよ、冗談じゃない……。

またもわたしは、危ないところをサトリちゃんに救われたんだ。

わたしは起き上がり、早苗ちゃんだと思っていた彼女を見る。

「あれ？ でも、こんなことしたら自分が死んじゃうんじゃ……？」

「ハハハ、臭いでわかるよ。このダイナマイトは張りぼてだ、爆発なんてしないよ」

「う、うそ……。か、完全に罠だったの……!？」

最初から、サトリちゃんは何もかもお見通しのようだった。だからあんなに落ち着いていたんだ。

「ううう……」

何も知らないで突っ走った自分が恥ずかしいよ。

「……ハ……ハハハ……」

さっきから俯いて黙っていた怪人が、何がおかしいのか、不気味に笑い出した。彼女が口を開くだけで、さるぐつわはぽろっと外れた。

「キャハハハ！ さすがは明智先生ですねえ！ だけどあなたはひとつ思い違いをしているようです！」

彼女の見開いた瞳が、赤く輝く。

「それは！ この爆弾がッ！ 本物ということだアアアアッ！」

え——!？」

「伏せろ、小林君！」

サトリちゃんはわたしに足払いをかけて、転ばせた。

「きゃ——」

わたしが床に倒れた瞬間。

閃光が炸裂し、天地を揺るがす轟音が響いた。

強い爆風が吹き、わたしは壁際までゴロゴロと転がされていった。

辺りに塵と煙が充満する。

「けほっ、けほっ」

でも、派手な爆発のわりには、なぜか建物も崩れていないようだし、わたしも無傷だった。

「大丈夫かね、小林君」

土煙の中からサトリちゃんが歩いてきて、わたしに手を差し伸べてくれた。彼女の手を取り、なんとか上体を起こす。

「ま、まさか自爆するなんて……」

怪人の考えることはわからない……。

「ただ、本物の爆弾だったら私たちもこのビルも、ただでは済んでいない。奴自身が爆発しただけらしいね」

怪人は跡形もなく砕け散ってしまったのだろうか。辺りを見回しても、一片の体の破片も落ちていなかった。

そんなもの、見ないに越したことはないけどね。

私たちは裏手からビルを出ると、正面口の周りは、人だかりと警察の車で大騒ぎだった。

「ね、警察の方に事件のことは報告したりしなくていいの？」

「いちいち面倒だし、いつものことだからね。警察にも怪人のことは任せるよう言ってるし」

「ふ～ん」

外見は小さい子だけど、ちゃんと警察のお墨付きなんだ。

確かに彼女は怪人と戦う知恵と魔法を備えているし、警察じゃ束になっても、ショゴスには対抗できなかっただろう。

有楽町駅に着くと、彼女は改めてわたしに向き直る。

「では、私はここで失礼するよ」

「あ、うん。色々ありがとう……ほんとに」

結局、最初から最後まで、彼女のお世話になりっぱなしだった。

最後まで手伝うと意気込んでついていっても、畏にかかりそうになっただけだったし。その都度助けてくれた彼女には、いくら感謝してもしきれない。

「気にしなくていい。私は私の仕事をしたまでだよ。それじゃあ」

サトリちゃんは御茶ノ水方面の改札に歩いていく。

けどわたしは……その小さい背中を、それで見納めにはしたくなくて。

「……サトリちゃん！」

彼女は振り向く。

「えと……あのさ……」

「なんだい？ 早く言いたまえ」

「その……今日は楽しかったよ！ また遊ぼうねっ！」

我ながら、場違いな言葉が出てしまった気がする。

「……はあ？」

案の定、彼女は怪訝そうに顔をしかめた。

「この戦いの、なにが遊びだったというんだね、君は」

「だ、だって……なんか、サトリちゃんと一緒に冒険したの、楽しかったから」

確かに色々大変だったけど、それは、素直に感じたことだった。普通の女学生じゃ、きっとこんな不思議な体験はできないだろう。

「だから、また会いに行ってもいいかな!？」

「……小林君。さっきも見ただろう？ わたしはとっくに普通の人間じゃない。怪人なんだよ？」

サトリちゃんはわたしを睨みながら、意地悪そうな笑みを浮かべた。

「いつ私の人格が失われて、君を殺してしまうかわからないんだよ」

なに？ それで脅しているつもり？

「でもそんなの、わたしだって同じでしょ？ わたしも怪人になりやすい体質なんだし。むしろサトリちゃんと一緒にいたほうが安心かな～」



彼女は目を丸くした。

「……小林君……」

一瞬彼女が身体相応の子供のように見えたけど、すぐいつものように呆れて。

「君って奴は……つくづく緊張感のない子だな……」

「エヘヘ」

「……まあいい。その印を着けていれば大丈夫だと思うが……何かあったら、事務所を訪ねたまえ」

そして、彼女は背を向けて歩いていった。

「うん、必ず行くよ！ 何もなくてもねっ！」

思えば、わたしはあのとき、サトリちゃんにピストルを向けられたあの夜から。

彼女の魔法に、かけられていたのかもしれない……。

エピローグ

わたしはあれから、特に用事がなくても頻繁に明智探偵事務所に通った。

ショゴスの扱い方も教わり、ピッポちゃんと名付けて、今では立派にわたしの使い魔となっている。

そのうち助手として仕事を手伝うようになり、やがて家事などのお世話もするため、同居させてもらうことになったのだ。

「そういえばわたし、先生に出会ったときはサトリちゃんって呼んでたんですよ～」

ちょっと信じられないなあ、と苦笑してしまう。

助手になったからには敬語で話すように、と命じられたのだ。

「……それで先生、今の話のどこに、二十面相と関係が……？」

「……君の頭は最初会ったときから成長が見られないね」

「あーもう！ いいからとっとと教えてくださいよ！」

「つまり、君を怪人にしようと、羽柴早苗の姿で近づいた怪人……。あれが二十面相だったんだよ」

「あ……！」

確かに、あのニセ早苗ちゃんも、変装したり銃が効かなかったりした。言動もどこか似ていたかも……。

「あのときは自爆に見せかけて、逃亡しただけだ。だから死体もなかった。君を怪人にするため渡した石は、インド人の呪いの宝石などと言っていたが、正式には『輝くトラペゾヘドロン』という。怪人二十面相とは、邪神『ニャルラトホテプ』が……人間と合体した怪人だ。奴は帝都市民に、自らの力の結晶であるトラペゾヘドロンを渡して怪人にし、その犯罪を傍観することに無上の喜びを感じている」

「やっぱり、邪神と合体してるんですか……」

あれ？

「でもあのとき、ニャル、ニャララ……？」

「ニャルラトホテプ」

ああ、もう言いにくいからいいや。

「あのとき二十面相は、自分からショゴスを操って、金品を集めていましたよね？」

「活動資金の調達というのも考えられなくはないが……それよりも、奴は君を怪人にすること自体が目的だったはずだ。だが私に妨害された。ショゴスは生まれたが、奴は人間が怪人になって破滅するところが見たいので、そんなものはいらぬんだよ。だから君と私をおびき寄せるために暴れさせたのさ。つまり、最初から爆弾と共に縛られた早苗に化け、君を誘って怪人にすることが本当の狙いだったんだ」

「そ、そんな……」

二十面相の手口は恐ろしい。いつ彼女がまたわたしの親しい人に化けて、わたしを怪人にしようとするかわからない。

「二十面相がいる限り、帝都には怪人が生まれ続ける。奴を倒さなければ、根本的な解決にはならないんだよ」

先生は立ち上がった。

「私は……次に会ったときこそ、この手で奴を斬るつもりだ……」

なぜか険しい顔で、自分の右手を見つめている。

「先生……？」

そういえば、いつもは怪人に対して容赦ない先生だけど、二十面相が相手のときは、なにか躊躇していた気がする。

それは、この前先生が呟いた名前……「文代」という人と関係があるのだろうか？

だけど、そのことを聞く前に、先生は歩き出す。

「ほら、行くぞ小林君」

「あ、は、はい！」

わたしたちは並んで、館の外へ出た。

二十面相が去った後でも、空は相変わらずどんよりと薄暗く、重苦しい。

それはまるで、わたしたちの行く道と、この国の未来を暗示しているようだった。



製作・著作 よもぎ史歌

ご意見・ご感想は下記までお願いします。

moondiana★hotmail.co.jp (★を@に変えてください)

Pixiv

<http://www.pixiv.net/member.php?id=1116253>

Twitter

http://twitter.com/#!/yomogi_fumika